

これから始まる奇跡の軌跡は凡そありふれているものではない。何者にも邪魔をされないパラダイスの中で人は何をするのかを選び取るのだらう。だからなのか、どこかにあったあの美しい景色を持ち出した者がいると知ったときから信じることを失っていることに。何もなかった。何かがあったのか？

そんなことを海辺で漂っている海鳥たちを見ながら思った。干潮だが海水はある。周りは森林に囲まれている。田舎の風情は凜とした感情を持ち出してくれる。嬉しいのか泣きたいのか。今の私にはわからない。

傍で歩んでくれていた人がいたことに心を安心させてくれることにも感謝の念を抱かずにはいられない。だって、それが。

それが、ずっと信じていることだったから。

黄昏時に見える。逢魔時に見える。誰彼時に見える。雀色時に見える。

どの視点も正しいのか正しくないのかはわからない。ただ、前を見ていると地平線が伸びきっていて茜色の空に染まっていた。美しいものを美しいと言えることが幸せの一部なのかもしれない。ずっとここにいたい。

「ねえ、あの時のことを覚えている？」

呟き声はどこにも響かない。嬉しくないわけではないがどこにでもある当たり前の景色を前にしても何も浮かびはしない。恐らく、海辺で泳いでいるカヌーを見ていることがそんな不思議

議な念を持っているのだろうと思う。

何をしているのかを問おうと思う。何をしたかったのかを選び取りたかった。だけど、それ
でいいと言えるのもまた事実。

綺麗な星空になりつつある。周りの虫の鳴き声が鳴り止みだした。笑顔になっていたのは私
か、それともあなたか。

そんな言葉を思い出したのは特に何かがあつたわけではないが下手したら嫌な顔になつてい
たのかもしれないと思つたのも事実。失つてはならない言葉を思い出してしまったのだろうか。
自然と、夜が近づきつつある。ゆつくりと自然の景色に溶け込む姿。ホツとしたら少しずつ
携帯している飲み物に意識が向く。美味しいと評判だった林檎酢を水筒に入れていたのだ。

近くに座るところはないかと探すと丸太が乱雑に切り取られた状態で放置されていたのを見
つけた。コンクリートを壁にして転がっている。そこまで歩いていきその途中、空を見上げる。
「あ、星。あの一等星、確か名前なんだつたっけな」

そんなことを呟いて丸太に座る。

特にやることのない日はこんな自然しかない場所で一人で過ごすことが日課になっている。
いずれ、こういうところに別荘を持てればよかったのに、と過去に後悔したことがあつたがそ
れはそれ。そういうこともあつてもいいだろうと思ひ直したことがなぜか懐かしく思つた。

丸太に座ってペーシツクな銀色と黒で縁取られている水筒のキャップを外し口元に当てる。

そのままゆつくりと流しているが、一気に飲むと酔というものは喉にひっかかるといってもなくむせるのだ。なので仕方なしにゆつたりと飲んでいるのはやはり仕方なしなのだ。

「重要なことなので二回思い出しました」

誰に言っているのかはわからない。思ったことを口にすることは止めようかなとも思いました。

綺麗な夜空に変わっている。美しい世界のことを考えてみれば、少しはわかるのだが、それはそれで良かったのかもしれない。

「寒いな」

まだ夏だが、浴衣姿では暑いはずなのに針と軋むような寒さは海風がよそつてくるのだろうか。なんとなくそんなことを思う。綺麗な姿だと思いきもない面白いことを覚えているのはいいとも良かったのだと。

誰かに向かって話しているような思い方はどこか遠い郷愁感を思ってしまう。故郷を思い出すように思う。

まだ、幼かった頃に姫と呼ばれていたときがあった。友達にも渾名として、つけられていた名前から考案してくれた。その姫という名前は今でも苦笑してしまうエピソードがあるのだと。私が幼稚園児で友達と砂で大きいお城を作ったのだ。それを自慢していると突然保育士の人に身体を持たれてその砂城に乗せられた。まだ完成して間もないからそれを使って王国の話で

もしてしまったのだろう。私はすぐに姫様役として担当をつけられた。そして綺麗だった城が見事に崩壊してみんなが笑った。というか恥ずかしくてその保育士をポコポコ叩いた。というか保育士の目がいろんな意味で真剣だったのでふてくされた私。それを見て友達がまた笑う。次の日から一緒に遊ぶときにその思い出を引っ張り出して私のことを姫と呼び始めたのだ。砂場に集まって城を作って姫様役として一日を繰り返していた。

そんな毎日の頃、友達の一人が王子も作ろうよなどとてもないことを言い出した。恥ずかしくて「止めてよ!」と言ったが「お姫様権限でそれは否定する!」と言ったが「じゃあ、王様権限で王子様を肯定する!」と意味不明な返され方をされてしまった。

そして王子さまは決まりました。幼稚園児と言えども好きな子はいなのだ。周りは知らないと思うが、今でも親友になってくれている紗矢ちゃんに「じゃあ、王子さまはあの人ね!」と言われてしまった。

とにかく、幼稚園児と言えない目つきで獣が飢えているようだと言われ、それを王子さまに見られて驚かれながら手を繋いだ。

そんな恥ずかしい過去を持つていることがこんなにも身体をよじらせてしまうのは仕方なしと言えるでしょう。いや、少しは嫌になってくださいよ、と昔の自分に言っている気持ちがある。

「そういえば、紗矢、どうしているんだろう」

幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と親ぐるみで一緒に勉強をしていたのだが離れることはなかった。楽しい毎が続いていたのだが、最近、紗矢と触れ合っていないと思ひ出す。いつものように楽しんでいたら良いんだけどと心中で思っている。面白いことでもないだろうかと海辺を見つめる。

海鳥は海から飛び出した魚を獲るのを止めたらしい。海水が流れているだけの静かな空間。私のホツとする空間。美しい世界のことを考えると今でも楽しくなる。これから、どんな人生を歩むのだろうかと思わなくもない。

名前を思い出そうとしている自分がいる。その王子様の名前が付き合っている人ではないがただ、幸せのような気持ちがあったのは嘘じやなかったのかもしれない。どこか遠い思い出話でもしたくなった。でも、それはそれで良かったのかもしれない。

そろそろ眠くなってきた。思い出しても仕方ないと割り切って水筒から口を外す。なぜか中身が空っぽになっていたのは思い出している間にもしかしたら全部飲み干してしまったのかもしれない。

「家に帰りますかね。少しは楽しめたらいいけど。今日はのんびりと出来たしね」
気のせいかな、時が移ろいゆく速さが上がっていると感じた。何かの前触れかと考えたが、疲れていると自分に言い聞かせてそのまま、海辺から立ち去った。

星砂の欠片がキラキラ落ちてゆく。

海辺の虹色が掛かる海水の立ち昇る香り。

森の中にある小屋の中でたち込める妖しい宝石の魅惑的輝き。

荒野に咲く一輪の花。

「約束と絆」

昨日は外にいる時間が長すぎた。そのせいで風邪をひいてしまったからだろうか、紗矢に連絡を取るとすぐに家まで駆けつけてくれた。

「全く。夏とはいえ、浴衣姿で半日も海辺にいる必要なんてあったわけじゃないんだから」

はい、と反抗せずに素直になっことり笑顔を作るがすぐに表情が落ち込んでしまう。その様を見てか紗矢は私をベッドの上に再び乗せて毛布を強制的にかける。

「暑いよ。なんで毛布なんてかけるの」

「普通はね、風邪のときって汗をかくのよ？ 汗をかいて体温を少しでも下げようとするのが大切な」

と言いながら、エアコンをリモコンで操作した後、キッチンに立つ。

「それで？ なんで私を呼んだの？ 別に桜の悩みを聞くんないけどね」

ベッドでもぞもぞして薄らと見える紗矢の赤みがかった髪は毛が一つにまとめられているのは相変わらずだと思ってしまう。

外を見れば明るい空が輝いていた。美しい空だ。心に残りそうなそんな感傷を抱いてしまうような。

紗矢の後姿を見ているとふと気になることがあった。昨日の大切な付き合いをしていた人に別れを告げたことを。

紗矢はいつも笑っていることがあるがどこかで見つけたその人にしか見せない表情もある。私に向けてくれる笑顔とその大切な付き合いをしていた人に向ける笑顔。その差は一体なんだろうと考えてみても仕方ない。でも、そんな言葉がつかかっているのが心の中である。いつもどこかに見せた誰かの笑顔。どこにでもあるようなそんな当たり前な日常なシーンを今送っている。

「ねえ、桜。最近、調子どうなのよ。綺麗な浴衣なんて着て海辺を歩くなんて」

私の心配をしてくれているのが手に取るように分かるので素直に嬉しさを感じる。一人で考えることはあまりよろしくないと最近知ったことだ。紗矢のことに関しては楽しく思わせていただいている。キッチンからリズミカルに包丁でまな板を叩く音が聞こえる。一軒家の為、両親がいるはずなのだが、今はいいよう。

「えつとね。とりあえず風邪をひいているから喉が痛いので簡単に説明をするけれど……ゴホ

ッ。独りで淋しかった」

「独り……。私がいるのに？」

「いや、そうじゃないの。私が大切になっている人と話したいんだけど、その人ね、違う世界にいる人なの」

「意味わかんないのは疲れているからって認識していいのでしょうか」

「ダメです。というか、その海辺で逢っていたとかでも思ってたの？」

「思いたいんだけどねえ、と軽口を叩く紗矢の言葉に思わず苦笑してしまう。足音が聞こえている辺り料理が完成したらしい。

「はい、レモンもあつたから。先に食べてみて」

「やだよ。そんなすっぱいものお！」

「どうしたの。変なテンションで。疲れていると認識していいのでしょうか」

ビタミンがあるから風邪に効くと思つてのレモンなんだろうが、お口に合わない気がするの
は私だけだろうか。

室内に蛍光灯がパチパチと音を鳴らしながら光が刺さる。家屋に誰かの聞こえる声と足音が聞こえると、頭にイメージされる。綺麗な星屑を眺めたいと頭に鳴り響く鐘の音。思わず泣いてしまう。

「ちよつとちよつと、どうしたの。そんな辛かったの？」

紗矢には言って良いのだろう。いつも大切になっている人と話したかったのに、昨日は現れてくれなかった。忘れているのだろうか。それとも違う人といえるのだろうか。

わかつてはいる。いつもその大切な人は私のことを懇切丁寧に記念日になったらアクセサリを作ってくれる素晴らしい人だと。そしてそのアクセサリには魔力が籠っていて、それが綺麗に輝くときにまた逢えるのだと。

「あのね、その大切な人が違う世界にいる人って言ったじゃん？」

「それはさっき言っていたね」

「それでね。一緒に夜空を見上げたかったんだけど、その人ね。最近流行りの異世界の扉にいたの」

「異世界？」

うん、とそっけなく答える。誰も知らない、私と大切な人の関係で一緒に楽しんだ記憶。その記憶の中に二人でいたこと。

異世界のことになると私はいつも辛くなる。森の中で出逢ったその人と一緒に遊んでいる子供達。

花畑にいたあの人が私を見つめて喜んでくれたこともある。それはとても貴重な楽しみ。それはとても大切な出逢い。一緒に笑ってくれた大切な記憶と記録。脳内に刻まれている楽しい思い出。

いつものように楽しい生活をしていたのだろう。その異世界は平和だから誰もが喜びを抱いて生活をしている。

森、山、島、荒野、そして幸せ。

その言葉だけでも想像力が働かせられる。楽しいのも哀しいのもひっくり返して思い出の中にいる二人。それを祝福歓迎してくれた周りの人たち。私は幸せだった。

だけど、神々の指示で異世界から抹消されたこと。つまらないことをしてしまったこと。二人でいられない、苦しみが寂しさを呼んだのだ。いつものようにみんなと楽しみたい。いつものように二人で遊びたい。いつものようにキスをしたい。

笑っているのに、哀しくて。喜んでいるのに、包まれた悲哀。まるで食事をするかのように話をした。会話をした。

どうして？ そう、神様に聞いた。幸せを破壊した理由があつたのですか？ そう、神様に聞いた。

でも、脳内に響くのはいつもせせら笑いと嘲る笑い。誰でもいい。私のことを信じてくれないの？

そして、気が付いた。現実世界にいる人がそこにいるではないか。その人と神様と闘おうと思つた。

その人は紗矢。香坂紗矢という私の親友。そしてその大切な人を手に入れる。そして三人で

暮らしたい。幸せの為に。永久に。永遠に。

だから。私は。

「そっか」

私を信じてくれているのかはわからない。だけど、紗矢には伝えて、私とサヨナラをするわけにはいかないけれど、いずれ二人で暮らせたらいいね、と言ってくれた紗矢に感謝の気持ちが昔から沸々と湧いていたのだ。嬉しくて仕方ないのだと。だから、素直に想いを告白した。

「うん、ちよつと考えることがあつて、聞いていい？」

もしかしたら、否定されるのかな、と絶望的な気持ちになりかけたがきちんと聞く。

「その大切な人と私をどっちが優先される？」

あ、と思わず声に出してしまう。そんなことを考えることはなかった。だからそのことも素直に言う。

「どっちも優先できない。だって、それは」

「それは？」

「紗矢と同一の存在だから」

は？と思わず声に出されてしまう。そんなことがあるのなら、というよくわからない顔をしている。紅い瞳が宿る。アクセサリーが紗矢と共鳴する。運命を感じるのだろう。横になっているがそのまま首にかけているサークレットを外して、紗矢に渡す。

「それが異世界への扉を開けるものだから。首からかけてみて。多分、勘が当たるのならそのまま異世界への扉が目の前に現れるはず」

少しだけ啞然とした表情をしている紗矢に外の黄昏時の光が差し込む。もう、夜は近い。

手渡された銀色のサークレットをゆつくりと首にかけている。安心した表情をするお互い。それは。

「ああ。やつぱり、彼女のことを大切にしていたんだね」

紅いローブに包まれた天使が目の前に現れそう答えた、と同時に現れた異世界の無数の色が飛び交う動く扉を開いた。その奥には深淵の闇しか見えない。空を見上げる。もう夜になっていた。時の速さが変わる。

「サクラさん。あなたが渡したの？」

「うん。いつものように異世界に産まれた人としてあの人に出逢って闘うために、紗矢に渡したの」

「大切な人……。夢でも見たの？ こんな質問しても仕方ないかな。綺麗な彼女」

紗矢の頭に天使さんが鉄を溶かした樹鉄で造られた冠を乗せる。それは異世界の中で暮らしていて王族の者しか載せられないもの。それは私の大切な人が国の王子だということを教えてくれる。

「さあ、貴女の名前は？」

「えっと、香坂紗矢です」

素直になったね、とどこかで聞こえた。

「サヤさん。行きなさい。この扉を開くということは異世界に移るということ。それは貴女の運命がころころ変わる。そしてその異世界で共に過ごす生活を行為として行うことなのよ。そしてそれを意識するのが貴女の役目。落書きでもしたら？」

その意味は。

自分の示していた道を新しく創るということ。

「わかりました。では」

もう、紗矢も覚悟してくれたよう。嬉しい、と思う。

「サクラ。あなたも乗せるわね」

私にも天使さんが樹鉄で造った冠を乗せてくれる。

「まずはお父さんとお母さんに謝りなさい」

はい、と答えて、私と紗矢は異世界の扉を開ける。そして私の意識が途切れつつある中で一つだけ想った。

二人で暮らそう。

草花の香りが手紙を作る。

川に流れる橙の夢。

緋色の空を虹色の鳥と観察する。

悪夢と聖夢を創り出す創造主の笑顔が。

今でも心に焼き付いている。

とりあえず、ここに来ることは久しぶりだった。異世界、ウインドウ。

私がまだ、幼かった頃に一緒に踊った子供と遊んだ時。久しぶりという単語に惹かれて友達と呼んでいたあの子供は今どこにいろのだろう。一生懸命に頑張っていたのは何だったのだろうと思わなくもない。

森の中にある小屋の中から外を見る。意識が明確になりつつある。

黄緑色の葉桜が蒼葉を散らせて虹色の風になびかっている。美しいとさえ思う、樹々に咲き誇る桜吹雪。枝が何本も茶色の土に突き刺さり、踊る兎や狸の草むらを駆け巡るときに聞こえる搔きわけの音。空に流れる海水。

幻想的姿に心は踊る。楽しくて仕方ない光景。

ウインドウはそんな光景が当たり前な世界。とてもじゃないが、二人で一緒に遊んだ景色は今から思い出せるわけがない。友達はどこにいるのかはわからないが、手に持っていた杖に魔力があつたことを思い出すと、その杖が心に突き刺さっていた。まるでそこにあつた土道に刺

さった枝みたいに。

「さてと。どうしますかね」

意識が明確になりだして周りを見てみるとふと気付くことがあった。それは誰かを誘っているかのように存在しているそれらの道筋。ウインドウの意思がここにあるのだろうか。私を誘っているかのようにしか思えない。それほど、風が吹く方も樹々が立ち並んでいるのも綺麗に咲いている花畑の花の向きも誘っているかのよう。

とりあえず、道に落ちている枝を拾って空に向かい投げる。綺麗に放物線を描いてそのまま風のゆくままに流れていく。そこから光が零れる。空は美しく、まるで転がっている石を研磨した後光ってそれを映し出しているかのようだった。空は海の色を映していると知っているから、それはとても綺麗な色合いだった。

零れ落ちる涙がなぜか頬に流れる。紅涙に空を見ているはずの意識が美しさも忘れさせた。そんな印象はどこにでもあるような、そんな既視感。美しき存在は今でも在るとふと感じた。

林道に土があるその道を誰かが進んでいく度に出来たであろう踏み鳴らされている道をただ進んでいくことに決めた。心にあるであろう綺麗な景色が呪われた宝玉を映し出す。それはウインドウでは当たり前な呪詛を唱えるための水晶のようなもの。綺麗な景色の裏には素敵な生き物が支配しようとしているのだから。

歩くことにして、どれくらいの時が経ったのだろうか。私はまだここで立ち尽くしている。

王城があつたはずだがここはなぜこんなにも楽で苦しいのだろう。いつまで経つても空は黄昏時を迎えることはないと思ひ出す。

友達はこちら辺にいるのだろうか。いや、いるわけがない。

「なんで、こんなにも苦しいのかね。というか、サヤ、いないし。普通いるはずなんだけどな」
わからず、ただここでのんびりと待っても仕方ないが。もしかしたらだが。

「まさか、時が止まっていて、動けるのは私だけとか？」

一人考える。思考を止めるつもりはないのだが「もしかしーの」と呟いて考えるが、この美しい光景をどうしてか無駄に思ひ出してしまふ。綺麗な景色。美しい光景。思わず魅入ってしまう空の色合い。

蒼、紅、翠。

たつたその三つに何かが在るのだろうか。

「神もいじわるだね。私に何をしろと。動いているかのように見える時が始まってほしいよ」

動くことができるのかを確かめるため手を翳す。そしてさっきの枝は放浪してしまつたらしくここからは消えていた。さっきの動かし腕はどうやら大丈夫らしい。

「動かせるね。じゃあ、頭の中にある何かが私を止めているんだなあ。何だろうなあ。もしかしーの」

胸に手を当てる。鼓動はきちんとリズムよく働いている。そのまま、アーメンと呟きそうに

なつて気づいた。

「天使を呼べてことね。ああ、そうですか。なんで？」

私の中にサヤがいることに気付く。そうでないとおかしいのだ。

普通、従者を伴つてこのウィンドウに現れる。それを証明するのはもちろん、周りの光景と景色と空。風もそうだがここに来たら誰もが従者に気付かなければ時を止めると元々居た現実世界に返される。そんなルールのような自然の暗黙の了解があることに私は気付いた。それが当たり前なのだから。そうして気付かなければと、サヤは言っている、気がする。

「うーん。とりあえず、空を見上げてみな」

思い出してしまふのは私の過去。二人でいたように遊んでいたように。

あの友達とサヤは関係ない。二人で遊んでいたのは私と友達の秘密だ。一緒にいたのが当たり前だったから、いなくなつてしまつても帰つてくると信じたのも当たり前だった。

だけど、私がいなくなつてしまつてそこに過去だけが残つて友達は悲嘆に暮れてしまつたんだろう。だから私は何度も空を見上げた。その空に二人でいた記録をアカシヤに残した。万物に過去と未来が存在するアカシヤ。現実世界だったら、アカシックレコードと呼ばれるものと同じだ。全ての根源として存在しているのは変わつていないはずなんだと自分に言い聞かせる。その記録を見上げていると、どうしてここにいるのかもわからなくなつてしまったのも自然ではない。その記録の中に友達が一緒に創つてくれた記録が存在している。二人で見上げた

蒼空を絆にしたということ——。

どうしてこんなにも辛いのか？ どうしてこんなにも怖いのか？ 一人でいることから逃げなかったよ？

私は嫌なことを思い出しているなど、客観視から俯瞰している感情をどう扱えばよいのかわからない。どこまでも一緒にいてくれると約束してくれた刻。その刻を私は信じている。

一人でいたことはいつもそうだった。友達が友達として付き合ってくれる前はただただ一人で遊んでいた。滑り台やら、ブランコやら。そんな、公園には当然あるであろう、遊具で一人遊んでいたのだ。両親も私を見捨てていたのか、特に話すこともなかった。いや、もしかしたら、それが私に対しての付き合い方だったのかもしれない。一人で教育的指導を学んで一人で立派な大人になること。

それが私のウィンドウの在り方だった。ウィンドウにはいつも独りでいる子供を育てる孤児園のようなものはなかった。だから、独りでいることに耐えきられるわけがなかった。だって、それは。

孤独を知った絶望の瞳を受け止められるほどの人はいなかったということだったから。

独りだということは学ぶことなんてできない。一人だということはただ二人になれば良い。それに気づいたときは楽だった。

——なんだ。ただ、私は必要とされていない人なんだ。

そう思つてそれを呟いたら、いきなり頭を叩かれた……！　びっくりした。

「そんなわけないでしょ。あんた、馬鹿？」

いきなり、いきなりなことを言われたのでいきなりなことを言い返す。

「あんた、つていうのはあんたぐらいよ」

いきなり、という単語が面白いぐらいに二人で言い合つた。バカだとか、アホだとか、クズだとか、ゴミだとか。そして気付いた。

「ははっ！　あんた面白いじゃん。名前は？」

「サクラって言います。お友達になつてくれる？」

「良いよ。私の名前はね、リン。あなたの元の世界のカンジで描くと」

そして地面に漢字を書いてくれる。

「隣。こう書くのよ」

「そっか。名前、もう一個ないの？」

「もう一個？」

「うん。私は……」

そうだった、と思ひ出しても後悔しか残らなかった。それは、両親とはもう付き合わないと勘当してしまったからだからだ。だけど、リンはそんな私を見て何を思ったのか、じつと私の紅い瞳を見つめて。

「なら、二人で合成しよっか。私がもう一個で、いつもは貴女。だから繋げて、サクラ・リンで良いじゃん！」

リンはなぜか、私の周りでびよんぴよん回って喜んでくれて、そのときはじめて私は心の奥底から笑った。

「そうだね！ 私、サクラ・リン！ いつまでも友達になってくれるのはあなただけ！」

「そう！ いつも私たちは友達！」

そして二人で結んだ絆をアカシヤに記録した。

そんな過去をサヤに向かつて言うと、爆笑しているので無視して、思い出したアカシヤを見つめる。そこからゆっくりと鉄で出来ている鎌を持った天使さんがゆっくりと飛んできた。その姿は相変わらず白かった。他に色はあるだろ、と思わなくもないほど白かった。とにかく白かった。とりあえず白かった。何度も繰り返すほど空の色を吸収しながら白から橙に変わっていく。

「サクラ。リンのところに行きたいのでしょうか？」

あらあら、と心の中でサヤが突っ込む。リンより私よとでも言いたそうだが、私は私でここにいるのは苦痛ではないので良いのだが。

「行きたい。というかなんで私がここに来たのわかったの？ いつものことなんだろうけど。でも、天使さんが来るってことは王城まで連れてってくれるってこと？」

「そうよ。王様も王子様も王女様も待っているの。ウィンドウに来るのは久しぶりだろうから時々是这样やって息抜きがしたいのよ」

あなたを見ていると時々、リンのことを思い出すのよ、と最後に聞こえるか聞こえないほどの声を絞り出すように呟いた。なにかあったのだろうか。私にはとてもじゃないが久しぶりすぎて笑えないのだが。一体、リンをどれだけ一人にしていたのだろうか。

それは私の罪だから、仕方ないのだから。

いつまでも考えても仕方ないから、ゆつくりと降り立った天使さんの羽根に手を乗つける。

綺麗な羽根は鶴のように大きく、幸せに満ちた表情をプレゼントしてくれるかのように優雅に羽搏く。綺麗な瞳をしている天使さんはやはり、綺麗なのだ。

「にしても、いつまでも待っているわけじゃないのよ？ リンが孤独なのは今も続いているの。だから行ってあげないとね」

そっか、と心の中で一人呟く。孤独な世界の中で王城で独りなのはまずい。いつまでも続いているわけがないのだから。一生懸命に私を支えてくれた過去はいつも私のものだから。

独りで支えてあげなければならぬのだから。それを今度は私が行う番。二人で遊んだ大切な記憶をいつまでも、永久に、永遠に。

永遠という言葉が私には似つかわしくない。そんなふてくされて苦笑いされる表情を今まさにそこにいるかのように見たような気がした……！ びつくりした。

「もしかして、あんた……、サクラ？」

そう、この天使が孤独になっているということに気付く。

「どうしたの？ 天使さん？ もしかしてって知っているでしょ。貴女が天使っていうこと」

「いや、私の瞳に気付かない？」

「うん？」

サヤに確認をしてくれということだろうか。そんな暗号のような伝わり方をしてサヤが見つめたのだが、驚いていた。

「え？ リンっていなくなつたの!？」

「もしかしてって。サクラ。リンは私達も知っているのよ」

それは？

「それはね。リンがいらないから貴女が友達を失つたのよ？ リンはいなくなって貴女を捜しに現実世界に行った」

「え？」

「その姿見たい？」

孤独な光は闇に轟く。

音色はいつも虹色に輝く。

海辺で富んでいる水汐。

渚の景色にいつまでも。

天使は待つている。

そこにいつまでも揺蕩っている姿が海辺に映されていた。綺麗に切り取られたかのようにその姿だけが在った。それはどこで間違えてしまったのかわからない、と言っているようだった。サヤが私を見つめている。ホツとした表情をしているのは気のせいではない。

「大丈夫？」

いつの間にかサヤがそこにはいた。いつの間にか私がここにいた。

泣いている。私は泣いている。ずっと二人で遊んでいたときのように笑ってくれた、サヤ。リンはいなくなつたのかな、と。私がここでずっと待っていたのはサヤだけだった。

他には何も無い。ただただ、空が広がっているだけ。いつの間にか、いつの間にか。

ここには何も無い。ただただ、海が広がっているだけ。美しさと共に感じた、あの情感。必要なものはもう誰かに渡したのだろうか。それとも、リンがいなくなつたのは。

「サクラ。ずっとここで笑っていたんだよ？」

サヤはただただゆっくりと海辺を見遣つて歩いている。何故かその姿があまりにも美しく、私は涙を流している。

もう、何もする必要はない。二人でここにいるという事実。

それは誰にも邪魔されない世界がここにはあった。

「私はサクラがいてくれるんなら他には何もいらないの。覚えてる？　ここで私達は出逢ったの」

美しい夜空だと、場違いにそんなことを思う。美しい姿だと思ってしまうのは嘘じゃない。いつまでも繰り返してしまった永久の運命。定めに逆らわず、私は少しだけ笑ってみる。

何も出来なかったのはこのウィンドウにいるからだろうか。わかってしまったのはそれだけかもしれない。

「ここはもう、崩壊するの。でも、それはウィンドウが勝手になくなるだけ」

サヤは私の教育をあきらめなかったかのように笑っている。「いつも私がいけないといけないもんね」と言いたげそうな表情は私を安心させてくれる。

「ゆっくりと帰ろうよ。二人で遊んでいたあの海辺に」

それはここじゃないの？　と質問はさせてくれなさそう。でも、私は笑った。思いつく限りの笑顔を浮かべた。

その全てを愛してくれたのはサヤだけなのだろうか。私にはわからない。でも、それでいい、と自分に言い聞かせる。

「あのね、私がいるのはここに在る必要性があるからなの。でも、それも終わり」

ウィンドウは風という意味。だから、私たちは草原の上を奔り抜けるかのように颯爽と世界に現れればいい。それが私たちの役割。

「昔ね、サクラに言ったことを後悔しているの。覚えてる？」

少し寂し気に私に笑いかける顔が水平線から映る陽の光で陰って見えたから笑っていたのかはわからない。

「幼稚園児のときにサクラがまだ、砂城を作ったって聞いたときは嬉しくて見に行ったんだけど、そのときにはもう壊されてて。王子様のことを私が勝手に決めたこと」

そして、と一言、間を置いて、また陽の光で表情が見えない。

「王子様は私が良かったの」

星砂の欠片がキラキラ落ちてゆく。

海辺の虹色が掛かる海水の立ち昇る香り。

森の中にある小屋の中でたち込める妖しい宝石の魅惑的輝き。

荒野に咲く一輪の花。

草花の香りが手紙を作る。

川に流れる橙の夢。

緋色の空を虹色の鳥と観察する。

悪夢と聖夢を創り出す創造主の笑顔が。

今でも心に焼き付いている。

孤独な光は闇に轟く。

音色はいつも虹色に輝く。

海辺で富んでいる水汐。

渚の景色にいつまでも。

天使は待っている。

私はここに在る物、者に感謝をする。沸き上がる感情の奔流はここに在る物、者に全てを創る。

「この手紙。ここの海辺から最後に届いてほしいもの。届け、この想い！」

手紙だけが空中を彷徨つてゆつくりと空の上へと溶けていく。

「二人だけの世界にようこそ、王女様」

恭しく挨拶をする王子様に私は微笑んだ。

「ありがとう。一生一緒だよ。王子様」

私の代わりに。王子様の代わりに。

この異世界から手紙だけがゆつくりと脱出した。

そしてそこで私たちはゆつくりと。

お互いを抱きしめていた。

きつと、そんな日々が続く。

ずっと同じようなことが毎日のように起こるだろう。

でも、それでもいい。

ただただ、愛した人といられるのは幸せだということに、お互いが気付いたとき。

それは、本当の人の形なのだと。

約束された絆なのだと。

それを最後に、手紙を読んでわかりました。

ずっと、一緒にいましょう。

そう信じていたのはお互いだっただと。

そう、永遠に――。

『この手紙を書いた人は頭のイカれた人だと思われるかも。』

ですが、この手紙を読んだ人、貴方に言いたいです。

もし、自分の愛する人とずっといられる幸せがあつたらどう思いますか。

私達は名前を失いました。

その代わりに一緒に遊んでいられるように考えて行動した結果。

涙を流すことを辞めました。

もちろん、人を止めたわけではありません。

ずっと愛する人という幸せを享受したいのなら。

私達は貴女たちの先輩です。

いや、貴方でしょうか。

どちらでもよいことです。

私達のことを知っている人は両親かもしれませんが。

でも、お互いのことを昔から知っているのは本人同士しか知らない。

それなら、ずっと誰も知らないうちに終わってしまった結果は誰としても笑っているのだと。

そう思います。

もし、ここにある約束事を護るなら。

もしかしたら、ここから貴方、もしくは貴女が来るかもしれません。

なので、その約束事を最後に締め言葉として終わります。

来た時はもちろん歓迎します。

なのでその時はよろしくですよ？

では。

さようなら。

思い出の場所で過去と未来を重ねた今を見つめてください。

追伸

最後の約束の言葉は自分に当てはめて考えるんですよ？』